

## 内村鑑三の靈性

### まえおき―内村鑑三と私

先ず話のまえおきとして、私は内村鑑三とどのような関わりをもっているかというのを、一言申しあげます。私は敗戦後の混乱の中で人生を模索している時にキリスト教に接し、ある福音派の教会に属しましたが、なお深まりゆく信仰の懐疑の中で故山本泰次郎（注一）の聖書伝道雑誌「聖書講義」に出会い、山本先生を信仰の恩師と仰ぐようになりました。内村を知ったのは山本先生を通してで、私に内村観というべきものがあるとすれば、それはすべて山本先生に負うものです。以来四十年、私は内村のキリスト教に生きてくることができたことを無上の幸いと心得ております。

その著作を通して以外に知ることのない内村ですが、彼に対して私は「師事する者」弟子」の抱く特別の感情があります。もしいま内村先生が生きておられて、その前にでたとすれば、ヒゲを生やしたニーチェ張りのこわい先生の顔を見て、私は口も利けないほど緊張するでありましよう。しかし同時に、私は先生にお会いすることができた懐かしさで胸が一ぱいになるだろうと思えます。私は英語教

師ですが、若き日の石原兵永のように、「陽がそんなに照りつけているのに、なぜそのすだれを下げぬ。君のコンモンセンスが、そのすだれをおろすことを君に命じないのか！」と、先生に「英文法式に」に叱られてみたいと秘かに思っております（注二）。四十年の間に私の心奥にはぐくまれた内村像は、こわい先生であるとともに、極めて「人間味」豊かな人であります。

いま「人間味」と申しましたが、これは内村の言葉です。「ロマ書の研究」の第五六講において、彼は「人に欠くべからざる二つの方面がある」として *divinity*（神らしき方面）と *humanity*（人らしき方面）とを挙げ、後者を「人間味」と訳すべきかとし、「およそ人間味に欠けたる者が宗教的に偉大なるはずはない」と言っております（注三）。

### 靈性について

きょうの話に私は少々奇妙な題をつけました。多分多くの方々にとって「靈性」という言葉はあまりなじみがないだろうと存じます。事実、少なくとも口語訳にはこの語は出てまいりませんし、内村もその著作中に十回かそこらしかこの語を使っていません。それも大雑把に言って「真の人間性」という程の意味で使っているにすぎないようです。このように私どもには余りなじみがないのですが、カトリック教会ではこの「靈性」という語をよく使うよう

す。先日もひとりの神父さんからある修道会発行の雑誌を  
ちようだいしたのですが、それには「今日の靈性」という  
副題がついていました（注四）。

聖書には「靈性」という言葉はないと申しましたが、も  
ちろん「靈」という語はそれこそ数えきれない程たくさん  
使われています。そして「靈」には当然「靈の」という形  
容詞形があり、それが名詞的に用いられると「靈のこと、  
靈の人」となり、この訳語は聖書にも出てきます。「靈性」  
はほぼこの形容詞形に相当し、英語では形容詞は *spiritual*、  
その名詞形が *spirituality*、これが正に日本語の「靈性」  
です。 *Spirituality* という語は、あとで引用しますが、内村  
の英文著作に出てまいります。

内村に「人の三分性」（注五）というテサロニケ前書五  
章二三節（注六）の講解があります。内村が申しますに  
は、パウロの祈りの中に「靈と心（魂）と体」とあるのは、  
いみじくも人の三分性を示したものである。従って人が  
完全であるとはこの三部分全部が潔められることである。  
これが全き救いである。「そして神は福音をもって、人を  
初めにその眠れる靈において覚めしめ、しかる後に心をき  
よめ、最後に体を改造して、ここに完全に彼を救いたもう  
のである。明白なる、深い、貴き真理である。そしてかか  
る徹底的の救いがクリスチャンの内におこなわれつつある  
のである。ことに感謝すべきは、われらの靈性の覚醒なら  
びに挽回である」と結んでいます。

私の申します「靈性」とは、「かかる徹底的の救いが内  
におこなわれつつある」時に、外に、人の全存在に自ずと  
現れ来るもの、パウロの言う「靈の結ぶ実」（ガラテヤ  
五・二二）、ヨハネの言う「風は思いのままに吹く。あな  
たはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行く  
かを知らない。靈から生まれた者も皆そのとおりである」（ヨ  
ハネ三・八）の、「靈から生まれた者」の在り様と言って  
よいかと思います。内村が申しますように、人の救いは靈  
から始まり、それは必ず心（魂）―自己、精神的伝統、文  
化―を潔め、ついには体―生活習慣、倫理―の改造にまで  
至る。靈性の覚醒といって決して靈だけのことではありま  
せん。靈も心も体も一体として一新された、靈的、信仰的  
個性―その人のものの感じ方、考え方、生き方、事に処す  
る処し方など―、靈性とはそうしたクリスチャンであるこ  
との総体をいうものです。

### 内村の靈觀

内村の靈性を考えるに先立って、靈性のよってきたるそ  
のものである「聖靈」あるいは「靈」を、内村がどう考え  
ていたかを見ておきたいと思えます。二つの論文から抜い  
て読みます。一つは「いかにして聖靈を受けんか」（注七）  
で、もう一つは晩年の論文「靈と形」（注八）です。  
彼は聖靈についてこう言います。

聖霊はキリストの霊である。その御心である。そのご精神であるゆえに、これ、彼にならいつつてのみ、受くることのできる者である。常に彼を仰ぎまつり、そのうるわしき、貴さを知り、ここに彼のごとく全からんと欲するの聖欲を起こし、この欲の満たされんとを神に祈り、その祈禱の聞かれんために喜び勇んで神の命を實行し、もつてその恩賜にあずかることのできる者である。これを除いて、他にこの恩恵にあずかるの道はない。聖霊は神より出づる霊である。ゆえに道理の霊である。ゆえに明白なる道理にかなわざる道によつて得るべき者ではない。

さらに彼は次のような注目すべきことを言っています。

要するに聖霊の充分なる降臨は吾人の生涯にわたる神の聖働である。この不完全なる、かつ小なるわれは、一時に、聖き限りなき神の霊を受くることはできない。健全なる聖霊の降臨は徐々たる降臨である。われらの願うべきことは、その一時に迅風のごとくくだらずして、ながく軟風のごとくにそよがんことである。雷火のごとく臨まずして、朝の露のごとくにうるおさんことである。……：：：静かなる祈禱をもつて、深き聖書の研究によりて、休まずして急がず、断乎として動かざる神の戒めの実行によりて、キリストによりて神より出づる聖霊のゆたかなる恩恵にあずかるべきである。次の「霊と形」は英文の論説で「ジャパン・クリスチャ

ン・インテリジェンサー」に載つたものです。道家弘一郎訳で読みます。

わたしは霊を重んじ、形を重んじない。形は大變ひとを欺きやすい。最も悪い霊でも最も美しい形をとつたものがあり、最も美しい霊でも最も醜い形をとつたものがある。われわれは、それがとる形によつて霊を判断することはできない。近代的なものの見方の誤りは、形に注意を払いすぎ、「霊を知る」能力が乏しすぎることにあると思う。芸術と芸術的なものに対する現代の熱狂ぶりには、人類がいまや形を追い求めて霊を追い求めない―万人が美しく見えることを望んで、美しくあることを望まない証拠である。……

そして形にはいろいろある。肉体の優美さや完全さだけでなく、美しい、不快の念を起こさせぬ文体、人を傷つけない話し方、誰にも好感をもたせる技巧など、―これらはみな現代人によつて大いに求められているさまざまな形である。……

この形についての言い方などは、いかにも内村らしいユ―モアであると思います。

次に、欧米の近代のキリスト教徒にとつては不可解かも知れないが、と彼はこう言います。

しかし不思議なことに、聖書のキリスト教は、わたしの知るところでは、本質的に霊的であり、ほんの少し形式的であるにすぎない。それは、ある人の言った

ように、「九割が霊であり、ただ一割が肉である」。わたしにとって形は、礼拝の助けにならないのみならず、積極的な障害になる。声をもつ霊（静かな細い声（列王紀上一九・一二））と言葉（直接的な霊の交わり）は、礼拝の対象物や、あるいはそのための形（儀式）がなくとも、十分である。わたしは、内面的には霊において神を拝し、外面的には通常の人間的行動において神に仕える。

この「内面的には霊において神を拝し、外面的には通常の人間的行動において神に仕える」という言葉は、実に無教会主義の真髄、すなわち世俗に生きる信仰、万人祭司・伝道者主義の的確な表明であると思います。つづく「その論理的帰結にまで徹底されたプロテスト・テイズムは形なき宗教であるに違いない―純粋に霊的である―」という霊のことは霊によってのみ判断される信仰である」という言葉は、あれほどカトリック教会を尊敬しながら、「カトリックに成らず」（注九）と言った内村を彷彿させます。

そして、次のようなはなはだ常識的な指摘もしています。形式主義が物質主義に陥るように、霊性が非現実性に陥る危険性はあるかもしれないが、その本質においてそれ（霊性）は、あらゆる存在のなかで最も確実なものであり、健全な思考と有効な行為の基礎として十分に頼ることのできるものである。

ここに「霊性」という語が使われています。以上によっても、内村がいかに透徹した霊観と、霊に対する確固たる信頼をもっていたかが窺われると存じます。

### 内村の霊性

さてやっと本論にたどりつきました。

では内村の霊性はどのようなものであったか。私どもは何よりも彼の霊性の明確さに目を見張らされます。だからこそ私は内村の霊性について語ろうと思ったのです。しかし霊性は文字通り霊的で、見えないものです。形ではありません。形に現れるとしても、形ではなく、形を生み出したもの、霊そのもののことですから、これを云々するのは容易ではありません。しかし内村は「霊性はあらゆる存在の中で最も確実なもの」と言っていますので、この言葉に信頼して試みてみます。内村の霊性はもちろん一つですが、その表れは多様です。ここでは、はなはだ恣意的に四つの事柄をとりあげることになります。引用が多くなることをお許し願います。

**内村の道徳的雰囲気** 日本人のキリスト教受容ということを考える時に私が必ず思い起こす内村の言葉があります。一つはローマ書一章を講解した「接ぎ木の理」（注一〇）という論文です。彼の所論はパウロのそれとは反対です

が、いまは措くことにします。彼はこう言います。キリスト信者になるということは、台木である生まれつきの罪の人に神の子キリストが接がれて、そこに罪の人の悪しき実ではなく、神の子の善き実がみられることである。したがって台木（日本文化）に求められるところは、その質の良否ではなく、「ただその強健なることである。」内村はまたルカ伝一四章二六節（注一一）を注解して（注一二）、「（肉親を）憎むことは、情実の羈絆<sup>きはん</sup>を絶つことである。すなわち最も乾燥なる目をもって彼らの利害を見ることである」と言っています。また、ある教会の「会堂落成を祝するの辞」（注一三）の中では、「日本人はその信者なると不信者なるとを問わず、すべて、しめつたる人を愛して、乾いたる人をきらう」として、教会を健全にする方法は「常に乾燥せる空気をもって教会を満たすこと」だとも勧められています。

内村の持つ道徳的雰囲気（これは靈性そのものと言わずとも、その重要な一部です。）は乾燥と強健です。「ただ強健なる土台」に福音が接がれた時、「最も乾燥なる目」という極めて明確な靈性が生み出される。それは軟弱、華美で陰湿な日本人の古い心性と決定的に対立してしまうのです。そして正にこの点において、内村は日本人のキリスト受容において最も確かな試金石でありつづけることは間違いないと思います。

**内村の平和主義** 私は前大戦末期わずかながら軍隊生活を体験しました。これがいわば原体験となり、戦後内村の非戦論に学んで、キリスト教平和主義に生きることを決意し、不十分ながらそのように生きてまいりました。たまたま教師を職としましたので、若い人たちへの平和教育に携ってこられたことを、戦争世代の一人として感謝しております。そういう人間としては、次にどうしても内村の平和主義に触れないわけにまいりません。

内村はご承知のように、日清戦争（一八九四く九五）の時は義戦論者でしたが、十年後の日露戦争（一九〇四く〇五）開戦前夜には、彼の非戦論の古典的文章となった「戦争廃止論」（注一四）を発表して非戦論者となりました。

余は日露非開戦論者であるばかりでない、戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうして人を殺すことは大罪悪である。そうして大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。

なにしろ内村の非戦論は戦勝を機とし、それに憤激して生れた堅固なものです（注一五）。私どもが敗戦の結果唱えるようになった「優しい平和主義」とは違います。それなのに内村の非戦論にはどうも首尾一貫しないものがあります。彼は「戦争絶対的廃止」を主張しながら、一度日露開戦となると、非戦論の大きな後退とも思えるようなことを言っています。

戦争の悪事なると否とを議論すべき時にあらず。今は祈禱の時なり。同情、推察、援助、慰籍の時なり。(注一六)

して、戦時に非戦論を唱えるような非情な態度をとってはならない、兵役に服すべきものは進んで兵役に服し、納むべき税は納めよ、そして愛する者を失った寡婦や遺児を慰め、キリストの心を心として祈りと愛をもって平和の回復に努めよ、と勧め、さらに次のような驚くべきことを言っています。

逝けよ、両国の平和主義者よ、行いて他人の冒さざる危険を冒せよ。行いて、なんじらの忌みきらうところの戦争の犠牲となりて倒れよ。戦うも、敵を憎むなかれ。そは敵なるものは今はなんじになければなり。ただ、なんじの命じられし職分を尽くし、なんじの死の、贖罪の死たらんことを願えよ。人はなんじを死に追いやりしも、神は天にありてなんじを待ちつつあり。そこに、敵人と手を握れよ。ただ死に至るまで平和の祈願をなんじの口より断つなかれ。(注一七)

この内村の態度について、阿部知二はその著『良心的兵役拒否の思想』(注一八)の中で、「このような、良心的戦死といふべきものの宣言は世界にも類を見ないであろう」と言い、これを西欧の良心的兵役拒否とくらべて、「それは、残念であるが否定的な性格を多かれ少なかれもつも

のであることは避けえないのである。∴私たちは、内村の思想が国家への屈服であるとは、けつしていわないのであるが、そこに何らかの矛盾が含まれていたことは見ないわけにゆかない」と批評しています。少なくとも平和主義の立場から見れば、内村の所論はあいまいとも、消極的とも言わなければなりません。事実、内村はその点で批判され、修正されもしていることはご存知の通りです。しかし、彼は「非戦論の原理」(注一九)という、日露戦争後三年程して書いた一文ではこうも言っています。

私は今は非戦主義をいただきます。私は、非戦論は、道理として最も正しく、道徳として最も高く、政略として最も賢き主義であると思います。しかし、かく思いますればとて、非戦論に多くの批難すべき点がないとは言いません。その反対の主戦論にもまた多くの採るべきところがあります。少なくとも同情を寄すべき点があります。私は非戦論を証明しつくしたとは言いません。これを宇宙進化の理から考えて見ましても、また実際にこれをおこのうの点から考えて見ましても、これに多くの批難すべき点のあることを認めます。私は、より大なる真理として非戦論を採るのであります。絶対の真理としてこれをいづくのではありません。

私はこれらの文章を読んで、平和主義そのものの問題はさておいて、内村の「主義」というものに対する謙虚さに感銘を受けます。人は正義を掲げ主義に依る時、それが強

ければ強い程、驚くほどに傲慢になるものです。平和主義のためにはさえ人は戦い争います。内村にはこの主義者に有りがちな、勝ち誇ったところへ自己正当化)がみじんもありません。この謙虚さがいつも彼を健全にし、柔軟にしているのだと思います。

序でながら、これは彼の「無教会主義」に対する態度についてでも全く同じです。先程引用した「霊と形」の中で、彼は日本における四十年にわたる自分の伝道事業を語って、「よりよい名称がないので、わたしはこの形なき(靈的な)キリスト教の形を『無教会主義のキリスト教』と呼ぶ。しかし実質には、名称以上のものがある。それは否定的な信仰ではない。積極的な信仰である」(注二〇)と説明しています。昨今、無教会の理念、無教会の論理、あるいは無教会の名称などがいろいろ取沙汰されていますが、私どもは何はともあれ内村自身のこの謙虚と自負とにこそ学ばねばなるまいと思います。

そして非戦論も無教会主義も彼の靈性であることは勿論ですが、それ以上に彼のこの「主義」に対する態度の中にこそ、私は内村の靈性を強く感じないわけにはいきません。

**内村の平信徒主義** 無教会主義のことが出ましたので、次に内村の平信徒主義について申します。晩年の英文の論文に「わたしはキリストをどう思うか」(注二一)というのがあります。内村はここでイエスの完全性の美を賛嘆し

て、イエスは「ひとりの人間、たんにひとりの人間、人間そのもの、『人間』、すなわち『人なるキリスト・イエス』」と、もどかしいように同じ言葉を重ねて人間イエスを称揚し、人間であることの尊さを論じています。これが平信徒主義の根拠です。

「平」という字の好きな内村は「平民」という語もよく使っていますが、彼のいう平民とは、

「人らしき人」である。人として価値ある者である。地位とか爵位とか所有とかいうものを全然離れて、人たるの価値を有する者である。余の言う平民は「靈魂の人」である。内に足りて外に求めざるものである。真個の価値を赤裸々の靈魂に有して、これを飾るに位階、勲章の金箔をもってするの要なき者である。(注二二)

さらに、こうも言っています。

人をその本体において認むれば、純粹なる平民である。ゆえに彼は神が彼について定めたまいし偉大に達すれば達するほど、単純なる平民となる。肉体より離れたる靈、これが平民の本体である。神の前に独り立った裸のわれ、この「われ」に、位階も、勲章も、学位も、教職も付着しておりようはずはない。キリストの十字架の血をもってあがなわれし罪人、これが平民の完全性に達したる着である。そうして余輩はかかる完全なる平民となりたく欲う。(注二三)

平信徒主義は教職と平信徒の別を撤廃することですが、それは、内村によれば、

聖が俗化する事ではない。俗が聖化する事である。

聖ならざるものなきに至る事である。人生そのものが伝道事業となる事である。聖職と称して、神に仕うるための特別の階級が撤廃せられて、すべての信者が聖職となる事である。すべての職業が聖業となる事である。われらはこの理想に向かって進むのである。(注二四)

ということになります。そうして内村は、この平信徒の信仰を別言して「常識の信仰」、またキリスト教を「道理の宗教」と呼んで、こう言っております。

私のキリスト教は常識の教えである。常識と書いて、単に人間の知識をさして言うのでない。神が人類全体に賜いし知識ならびに通念をさして言うのである。私は私に起こりし特別の奇跡、または私に臨みし特別の体験によつてキリストを信じたのではない。私はいわゆる「見神の実験」を持たない。神は夢または幻影によつて私に現れたまわなかつた。私の生涯に特別の事がないではなかつたが、それは何びとの生涯にもある特別であつた。すなわち人は各自個性であるがゆえに、彼に特別の事あるはもちろんである。神が特別に私を恵みたりと言うは、特別に何びとをも恵みたくと言うにとどまる。私はかく言いて、私の信仰が特別に貴くな

いと言わない。神の恵みは特別なるがゆえに貴いのではない。その反対に、普通なるだけそれだけ貴くある。：私は神が何びとにも賜う賜物をいただいて、最大の幸福を感じる者である。(注二五)

内村の平民思想、内村の平信徒の信仰こそは、私どもの「日本国憲法」の人権思想ではありませんか。それは、平民、信仰の言葉で言えば「キリストの十字架の血をもつてあがなわれし罪人」であることに基づく「人たるの尊厳」をもつてその柱となすものです。この異教国日本にあつて、キリストを信じて生きる者の責任を思わざるをえません。

**内村のイエス信徒** 内村の生涯は苦難の生涯でした。それゆえにこそ、彼に豊かな神の恩恵が注がれました。私どもは内村を偉大な宗教家、揺がざる信仰者とのみ見がちであります。彼とても時に堪えられない思いを切々と告白しています。いずれも最晩年のそれを三つ程聞いてみたいと思います。第一は、一九二九年十月二十三日の日記です。死の五か月前です。

今日のごとくに、キリスト教界に不平家、ヒネクレ者、悪人、偽善者の横行、跋扈する時にあたりて、唯一の倚頼は完全の人イエスである。少しなりとも彼に似んこととが、わが最大の努力であらねばならぬ。信者と呼ばれずともよい。しかり「信者」でない方がよい。心、柔和にして謙遜者となりて、わが心に平安を獲ればよい。



人生の終わりに近づいて、キリスト教とキリスト信者とがだんだんと、いやになりて、ナザレのイエスのみが慕わしくなる。あるいはイエスに依るヒューマニテリアン

(人道教信者)として死ぬのかも知れない。(注二六)

第二は、ちょうど同じ頃に書かれた「キリストは何ゆえに私を愛したもうか」という一文ですが、それを彼はこのように結んでいます。

ことにわれらは、学枚の試験官が生徒の学力をためすように、人の信仰をためしてはならぬ。「あなたはこの事を信じますか、かの事を信じますか」と。信仰は頭脳の事でない、心情のことである。いかほどキリストを思うか、その事である。キリストに対する情愛の起こった者が信者であつて、起こらない者が不信者である。キリスト教を理解した者ではない。キリストを少しなりと愛する者である。その人がキリストに愛せらるる者で、真の信者である。(注二七)

この二篇だけを読めば、人は内村の正統信仰を疑うかも知れません。

第三は、一九三〇年三月十二日、永眠二週間前の日記です。

大先生が病氣にかかりし苦痛は、たぶん天皇陛下が病にかかれし時のごとくに寂しくかつ厭、苦いものである。信者の人々は、大先生は人生の事はことごとく御存知であるから、われわれごとき者が精神上の慰籍などを

御提供申すは無札のきわみであると思うらしく、誰一人として、友だちとなつて、喜びの福音を語ってくれる者が無い。ただ看護、物資の提供その他、この世の人のなし得る援助を与えてくれるにとどまりて、人生最も貴重とするところの精神上の力を与えてくれない。この過去五十日間、この点において実に堪えられぬ寂寥を感じた。しかるに今日、ある老姉妹が訪問してくれて、重病にかかった時の信仰維持の途を教えてくれて、自分にありがたかった。人はいかなる大先生であつても、自分の通過したことなき道の様子を知らない。自分が人の教師であるがゆえに、死に到るまでの道を知り尽くして居ると思ひ、誰一人これをもって慰めてくれる者なきを思うて、本当に人生の情けなきを感じた。しかし今日初めてこの喜びに接して、限りなき感謝を禁じ得なかつた。(注二八)

これらの表白は、例えば天達文子が伝えた内村の言葉、「僕が死んだら人々はいろいろなことを言うだろう。偉人だとか何だとか。そうしたら書いてくれ。僕が十字架にすぎないことを」(注二九)、あるいは若き日に彼自ら記した「求安録」の結語「さらばわれは何なるか、夜暗くして泣く赤子、光ほしさに泣く赤子、泣くよりほかにことばなし」(注三〇)、に実に見事に照応しているではありませんか。

そしてこれを内村の「人間味」の極致とすれば、すでに

そこには「人に欠くべからざる二つの方面」の第一「神らしき方面」が豊かに働き、divinity と humanity の両者「互いに相補って真の人」なる内村の「靈性」は、ここに美しく完結していると言うべきでありましょう。(注三一)

### むすび―靈性の働き

むすびとして靈性の働きということをしあげます。まず最後の引用として「靈の弁別」(注三二)という最晩年の一篇をとりあげます。

今や日本においてキリスト教といえ、きわめて漠然たるものである。愛を唱え、人類の救済を説き、平和、禁酒、靈的生命、地上における神の国の建設等を主張すれば、それでキリスト教として通るのである。(これは今から六十五年前に書かれたものです―念の為、筆者) …愛を説くものはすべてキリスト教、キリスト教でさえあれば、カトリック、プロテスタント、何の選むところはない。また新教でさえあれば、メソジスト、聖公会、無教会、何の異なるところあるなしと言うは、広きがごとく見えて、実は浅い見方である。ここに至って真理弁別の能力が必要になるのである。…天然物におけるがごとくに、宗教においても、事物を弁別する必要がある。そのための学問、そのための信仰である。私は私自身の信仰が唯一の真理であって、他

はことごとく異端であるとは言わない。こう言つて内村は次のように結論しています。

まことに信仰の相違はやむを得ない。しかしながら信仰の混同は極力これを避けねばならぬ。私はカトリック、聖公会、メソジストを忌むが、徹底的の彼らには深甚の敬意を表せざるを得ない。要は弁別にある。明白なる識別にある。人の知ることく、私自身は仏教徒にあらざしてキリスト信徒である。ローマ・カトリック教徒にあらざしてプロテスタント主義者である。教会信者にあらざして無教会信者である。私は、人が、この明白なる理由のために私を憎むならば、憎んでもらいたい。愛するならば、愛してもらいたい。敵に愛せらるるは、味方に憎まるる以上の不幸である。ギリシャ語の *diakrisis*、英語の *discernment*, *clear thinking*, 弁別、信仰上、こんなに大切なものはないのである。ここで内村が言う「信仰の相違」とは、「靈性の相違」と理解して宜しいでしょう。内村は靈性の相違に敏感な人でした。そういう靈性の人でした。「まことに靈性の相違はやむを得ない」のです。大切なことは、靈性の相違を弁別し得る能力をもつこと、私どももおのおの内村のように明確な靈性を生み出すように生きることであると思います。信仰の独立とか、自由というのはこのことです。

靈性について、さいごにもう一つ申しあげたいのはこう

いうことです。内村は「人の信仰をためしてはならぬ」と申しました。霊の体験は人のおのの秘密に属すること、誰もそれを窺い知ることはできません。「風は思いのままに吹く。それがどこからきて、どこへ行くかを知らない」からです。しかし人の霊性は、木に対する実のようにはつきりとそれを知ることができません。風が吹けば必ず「その音を聞く」からです。その時霊性が明確ならば、その霊体験も明確であることを想像させますが、しかし霊性から軽々に霊体験を判断することは許されません。(人の信仰をためしてはならぬ、とはその事です。) 私どもはただ互いに、同じ一つの風が吹いていること、そしてその風は、神の愛ゆえに、思いのままに誰の中にも吹きこむことを信じなければなりません。同じ風が吹くのですから、それによって生まれる音(霊性)が違うことを恐れてはならないと思います。内村の言う通りです。

ただしこういうことも大切ではないでしょうか。自分とは違う霊性の持ち主に対しても深甚な敬意を払いながら、めったにないことかも知れませんが、だからこそ、もし互いに同じような霊性に恵まれていることがわかったら、霊性に響きあうものを感じたならば、私どもはそのことを心から感謝し、率直に喜び合おうではありませんか。ともどもに一つ霊に吹かれて、たとえ拙くとも、美しいハーモニーを高らかに奏でようではありませんか。このことを別にして、無教会の交わりはないのですから。

〔これは一九九四年三月二十七日、鷗友学園講堂において行われた「内村鑑三記念キリスト教講演会」で語ったもの。以下に若干の注を付した。〕

#### 注

一 山本泰次郎(一九〇〇〜七九)。内村の晩年に十年師事し、月刊「聖書講義」に拠って一貫して文書伝道に従事した。『山本泰次郎聖書講義双書』全十七巻のほか、聖書注解、内村に関する著書多数。

二 石原兵永『身近に接した内村鑑三 上』(山本書店、一九七一)一二九頁。

三 「第五六講 小問題の解決」(注一七―二〇八)。以下、英文を除き、内村の文章はすべて教文館版『内村鑑三全集』(一九六〇〜七三)による。「注」は『聖書注解』、「信」は『信仰著作』、「日」『日記書簡』の各全集、次の数字は巻、|印のあとの数字は頁を示す。

四 「霊性」はふつう「エートス」と呼ばれているものに相当する。しかし「霊性」の方が「エートス」より個人的、宗教的と言えるだろう。井上洋治『余白の旅』(日本基督教団出版局、一九八〇)の中に「福音体験↓霊性↓神学」という示唆的な論考がある。鈴木大拙

- 『日本の靈性』（岩波文庫、一九七二）にも啓発された。
- 五 注一三一―二二六。
- 六 「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの靈と心とからだとを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように」。
- 七 信九―一五四。
- 八 道家弘一郎訳『内村鑑三英文論説翻訳篇 下』（岩波書店、一九八五）三六五頁。
- 九 「最も貴むべき教会」「カトリックに成らず」（信一―一八―四三、四五）参照。
- 一〇 注一―二三〇。
- 一一 「だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない」。
- 一二 「真正の忠孝」（注九―二〇二）。
- 一三 信一八―二四。
- 一四 信二一―二七。
- 一五 「寡婦の除夜」（信二一―二六）に、「明治二十九年（一九〇六年）の歳末、軍人が戦勝に誇るを憤りて詠める」とある。
- 一六 「国難に際して読者諸君に告ぐ」（信二一―四七）、

- なお「戦時における非戦主義者の態度」（信二一―四八）を参照。
- 一七 「非戦主義者の戦死」（信二一―五九）。
- 一八 （岩波新書、一九六九）八九―九一頁。
- 一九 信二一―九三。
- 二〇 前出『英文論説翻訳篇 下』三六九頁。
- 二一 『同右』三七三頁。
- 二二 「真個の平民」（信二三―一九六）。
- 二三 「緑蔭独語」（信一八―二〇四）。
- 二四 「聖俗差別の撤廃」（注七一―八一）。
- 二五 「私のキリスト教」（信一五―一〇二）。
- 二六 日四―三五八。
- 二七 信一〇―一〇四。
- 二八 日四―四〇二。
- 二九 天達文子「十字架にすぎる幼児」『回想の内村鑑三』岩波書店、一九五六）二七〇頁。
- 三〇 信一―二〇八。
- 三一 注一七―二〇八。
- 三二 信一五―二〇七。

（所載）「内村鑑三研究」第31号  
一九九五年年十一月